

マリーゴールド

「裏切るとは良い度胸じゃねえか」

三文芝居の乾いた台詞が、洞窟内に軽く木霊する。

「その上でノコノコと……よく俺達の前に面出せるな、ええ？」

男がライフルを構える。銃口の先を、訪れた女性に向け。

女性……面影は少女と呼んでも差し障りがな
いほど幼さを残しているが、男に向けた鋭い視線は、とても少女の物とは言い難い。

「覚悟は出来ているんだらうな？」

緊迫という名の空気。洞窟の一角が、この重
苦しい空気で満たされる。

一瞬。それが全てを決めるだらう。

両手に握りしめた各々の短剣に力がこもる。

相手が引き金を引くその瞬間まで、気の抜けない間が続く。

銃弾をかくぐり、一気に懷まで。そして喉元に短剣を押し当てれば勝ち。少しでも踏み込みが遅ければ負け。僅かに落とした腰が、勝負の号砲を待ちかまえている。

今か、今か、今か！

重くなる空気に押しつぶされぬよう、双方が息をのむ。

そして、勝負の瞬間は来た。

「お前、何をしている！」

第三者の来訪。勝負は、予期せぬ形で終わりを向かえた。

「ちっ」

悔しそうに舌打ち、長銃を構えていた男は脱兎のごとくその場を駆け逃げた。

「……大丈夫か？」

逃げていく男が見えなくなったのを確認し、勝負を終わらせた男が声を掛ける。

「あ……あつ……」

緊張がほぐれ安堵した為か、唇が震えなかなか言葉が言葉という形を成さない。

いや、唇が震えているのは緊張と安堵の為ではない。

「あんたねえ、なんでもー、邪魔してくれちゃうかなあ！」

「はっ、はあ？」

唇は怒りによってワナワナと震える事もあ



「タイミングが良かったのか悪かったのか……」

一連の出来事を聞き、溜息と共に妹が複雑な表情を浮かべる。

「ごめんなさいね。親切というか正義感というか、あなたに悪気がないのは姉も判つてますから」

ばつの悪そうな顔のまま、怒られた男は助けた……つもりでいた女性の妹に頭を下げた。

「まったく、折角チャンスだったのにさ！」

助けられた……つもりのない姉は、パイオニア2に戻つてもなお、愚痴をこぼしていた。

「もお、いい加減にしなさいよ、アナ。だいたい、一人で危ない事はしないって、約束したでしょ？」

妹にたしなめられ、とりあえず愚痴る事は止めた姉。しかしまだ不服そうだ。

「偶然、あのゲキガスキーの奴にバツタリ出くわしたただけだもん。これをチャンスと言わずになんて言うの？」

愚痴は止めても言い訳をする為に口は止まらない。

「それに、元々このゴタゴタはアナが……」

続く言い訳に、妹が割ってはいる。

「何度も言うけど、もうアナだけの問題じゃないのよ。私はもちろん、「あの人」や他にも色々な人達にも関わる問題なの」

まるで妹をあやすように、ゆっくり優しく、妹が姉をなだめる。

「汚名返上したいのは判るけど……ね、お願いだから」

姉は黙って、頷くしかなかった。納得し切れている訳ではないが、これ以上妹に心配を掛けたくないのもまた本音なのだから。

「ごめんなさい、見苦しいところを見せてしまつて。アナはともかく、私は感謝してるわ。ありがとう」

礼を述べられた男は、いえいえと軽く手を振る。

「ああ、自己紹介がまだでしたね。私はクロエ

・ウエインズ。こちらは姉のアナ・ウエインズです。失礼ですが、あなたは？」

名を聞かれた男は、改まって姿勢を正し答えた。

「ボガードです。見た通りあなた達と同じくハントーズに身を置く者です」

僅かながら緊張した面持ちで、軽く名乗る。

話しぶりからも、真面目な好青年という印象を受ける。

「あの、差し支えなければ……どういう事だったのか、教えて貰えないか？」

女性が銃口を向けられている。この状況に出くわしたならどうすべきだったのか。ハンターならば、男ならば、まず助けに入るのが当然と思っていたボガードにしてみれば、何故邪魔になつしまったのか、気になるところである。

「そうね……差し支えは正直あるんだけどね」
差し障りあるから駄目とはさすがに言えず、

にただ黙つて森の中を歩いてた。

ただの世間話。なんとなく沈黙が気まずいと思つたのか、ボガードから一方的に始めた会話だが、アナが黙つたままでは会話として成立しない。

「ところで、アナさんは何故ハンターに？」

会話を成立させるために、話題を振つた。だが、その振つた質問はハンターにとつて「野暮」そのもの。ボガードはその野暮を知らぬ程新米という訳ではないが、会話の流れから自然に口から出てしまつた。

「生きるために。憧れで生きていける程、世の中甘くないものね」

迫害され続けた双子のニューマン。守つてくれる両親もいない孤児であつた二人にとつて、生きていく事そのものが闘いだつた。ならば闘う事を生業とするハンターへと身を置くのは至極当然の流れともいえる。

だからこそ、憧れとか、生ぬるい考えでハンターになつたなどという話は面白くない。憧れで強くなる者もいる事くらい承知しているアナは、その動機を否定するつもりはないが、しかし不快さを隠すつもりもない。それが皮肉という言葉となつて現れた。

「あつ……すまん……」

そこで謝られるのも、なにか釈然としない苛立ちを覚える。それが「無視」という形で現れた。

アナは見た目以上にハンターとして確かな腕を持つており、経験は豊富だ。それだけに生ぬるい憧れだけでやつていける程、ハンターという生業は甘くはない事を知っている。そしてアナは見た目以上に性格が幼く、相手の気遣いや社交辞令を把握出来ない。楽しむ時は徹底してはしゃぐが、不機嫌な時はそれが直るまで頬を膨らませ不快感を露わにし隠そうとしない。

気まづい雰囲気のまま、二人は森の中を歩んでいく。

ボガードは失態の穴埋めとして「護衛」を買って出たが、当然アナは即座に断った。アナは今までハンターの仕事を一人ないしクロエと共にこなしていた。最近になって勢いだけは勇ましいヒューマーの男の子や愛くるしいフォマーの女の子と共にパーティーを組んで仕事をする事もあるが、基本的には一人だ。それだけ腕に自信があり、むしろ力量の知れないハンターと一緒に足手まといに成りかねないから。

それでもこうして今一緒にルプスの森を散策しているのは、クロエの一言があつてこそ。

折角だから、一度くらいお願いしてみたら？
ボガードに配慮しての、推薦だろう。このままではボガードの気が納まらず失望させたままにしてしまう。初対面の相手に気を使う必要があるかどうかは判らないが、仲間意識の強いハ

ンターズの一員だからか、それとも気を使う性格だからか、クロエはボガードの申し出を受けるよう薦めた。アナはそれに渋々答えたという形になる。

「ここだな」

無言のままであつた重苦しい雰囲気の中、ようやくと口に出たのは到着の確認と安堵。

「ここで待つようにとの指示か。しかし何を依頼する気なのやら……」

愛用の長銃ライフルを手持ちぶさたに持ち替えながら、少し愚痴る。

ボガードの護衛が乗り気ではないアナは、さつさと済ませようとギルドに寄せられた依頼の中から適当に簡単そうなものを選んで受けていた。その依頼が「ルプスの森の指定場所まで来て欲しい」という簡素なもの。依頼料がかなり低価な事から、たいした依頼ではないのは明白。本来なら駆け出しの初心者が受けるべき依頼だ

が、アナにとってつきまとう男を振り切るには
ちようど良い依頼とも言えた。

さて、いつまで待つのなら。まだとても回復
したとは言い難い雰囲気の中で、ボガードは頭
をかいた。

今更ながら、己の性格にほとほと呆れる。ボ
ガードは現状を改めて見直しながら一人反省し
ていた。

余計なお世話。それをいつたどれほど人に
押しつけてしまったのなら。正義の名の下に、
など大それた事を考えている訳ではないが、困
った人に手を差し伸べるのが男として当然とい
う、今時にしては珍しく硬派な考えを脳に定着
させているボガード。そんな自分が嫌いな訳で
はないが、もう少し手を差し伸べる前にあれこ
れと考えるからにしろと自分に説教をしたくも
なる。今回の事も、邪魔してしまった事はそれ
として、アナの境遇を聞いて護衛させてくれな

ど、どうしてこの口は言ってしまったのかと小一
時間自分に問いつめたい気持ちでいっぱいであ
った。

そして先ほどの会話。もっと自然に話せない
のかと自分を責め立てている。

硬派な性格であるからなのか、女性と会話す
る事が、それも軽い世間話といったものが非常
に苦手であった。仕事や用件で女性と会話する
のは問題ないのだが、親しく接しようとする
固くなる。それを意識し努力すればする程、な
にかちぐはぐでつまらない会話になってしま
い相手を飽きさせてしまう。先ほどもそうだ。ど
うにかこの場の雰囲気軽くしようと話し始め
たは良いが、相手を怒らせ余計重くしてしまっ
ただけ。

溜息を一つ。ボガードは一向に現れない依頼
人を待ちながら、自分のふがいなさを呪った。

まだ、空気は重い。それだけに溜息の声も重

く当たりに響いてしまう。

それだけ、今この場は重くとても静かだ。

それが、幸いだった。

ガサツ

微かに揺れた茂みに、ボガードもアナもすぐに気付いた。

「危ない！」

揺れた茂み、そこからキラリと光る何かが見えた。

銃口。その口は真っ直ぐアナに向けられている。

響く銃声。そして真っ赤な飛沫。

「ボガード！」

咄嗟とつさにアナを庇かばい前まへに出たボガードが被弾した。

「くっ……」

左の肩に鋭い痛み。そしてじわじわと染み広がる鮮血と苦痛。あまりの痛さに、膝を曲げ地

に付ける。

いや、これは痛みのためだけではない。

（麻痺……これは麻痺の属性を持ったフォトンの銃弾か……）

身体は痺れ言う事を聞かないが、ハツキリした意識と脳が自分のみに起きた事を冷静に分析していく。

「ちっ、外したか。まあいい、邪魔者を排除出来ただけな」

茂みの中から現れたのは、アナが待ち望んでいた、しかしこのタイミングで望んではいなかった男……ゲキガスキー。アナが抜けた「ある組織」の一員。

「さあ、続きといこうじゃないか、アナ」

どうしてここにゲキガスキーが？その疑問はすぐに追いやられた。今それを考える時ではない。

「……こつのお！」

間を取らず、速効で詰め寄るアナ。膠こうちやく着状態を嫌って起こした速攻ではない。完全に血が頭に上った結果の速効。

いささか危険だが、しかし効果はアナにとって優位と出た。

「くそっ」

迫る短剣ダガーの刃に対し、長銃ライフルでは對抗出来ない。組織の男は後退を余儀なくされる。

それでも、アナは更に踏み込み刃を喉元へと目掛け振り切る。

風を切るフォトンの音だけが、哀しく鳴り響く。

僅かに乱れた姿勢バランス。間を取り直した男は銃を構え、再度アナへ向け引き金に手を掛ける。

させじと、アナも再び踏み込む。だが退いた男は思った以上に後退していた。一步の踏み込みでは短い刃は届かない。そして二歩目は銃を構えた男が許してくれそうにない。

放たれた銃弾。

それは見事相手の右肩を捉え、深く貫いた。

「大丈夫か！」

後方から、ボガードの声。手には長銃ライフルが構えられている。

目には目を。ボガードは持っていた長銃ライフルの特殊効果……麻痺の属性を発動させ相手を痺れさせる事に成功した。むろん自分を襲った痺れはどうにか自分で香ソルアトマイザー水を用い回復させていたが、同じ事を倒れた男にさせるつもりはない。

「とにかく、すぐに縛り上げよう」

逃げられぬよう、ボガードは痺れ動けない組織の男をロープで手際よく縛り上げる。

「時折保安部から犯人拘束の依頼とかもある故、こうしてロープを持ち歩いていたが……それが役に立ったな」

何故ロープなんか持ち歩いている。そんな疑問をもたれる前に、自分から話し始めたボガード

ド。

「さて、こいつを保安部に着き出せば完了か」

まだアナの機嫌は直っていないかも知れない。もしかしたら、横から手を出し決着させてしまった事が、また「余計なお世話」になってやいないかとびくつきながら、ボガードはまるで独り言のように一方的な口調で話を続ける。

「いやしかし、護衛のつもりがそれ以上の成果を出せ、俺とし……」

不意に、アナが目の前に立った。それに少し驚き声を止めてしまったボガード。

やはり、なにかまずい事をしたか？冷や汗がこめかみより一筋流れる。

「うっ……ふえっ……」

アナが瞳を潤ませている。何か、何かもつと重大な失態を？女性を泣かせてしまうとは、いったいどれほどの大失態なのか？あれこれと心の中で慌て、しかし表には動揺を表すことなく

アナに向き直る。

「うう……ふええーん、怖かったよおー！」

泣きじゃくるアナに対し、ボガードはただ胸を貸す事しかできなかつた。

怖かった。ごめんなさい。良かった。ありがとう。

鳴き声に混じり漏れる、様々な言葉。それを聞きながらボガードは、有り余った腕をどうしたものかと悩んでいた。

ここで軽く包容してあげれば良いのか？しかしそこまで女性に馴れ馴れしく接して良いものかどうか。女性に不慣れなボガードは戸惑ったが、しかし結局は余った両腕をアナの背中に回した。

なんとなく、これが正しいと思える。そう思えた根拠はよく判らないが、これで良いと自分に言い聞かせた。

強いて根拠を示すなら、愛おしかったから。

「ならば、今度から組まない？」

突然の申し出に、またボガードは戸惑いを見せた。

「いいよ、あなた。良い腕してるし、よく見たらいい男だし。なんか頼れそうだし」

一転して、ご機嫌なアナ。自分を褒めちぎってくれるのは嬉しいが、照れながらもどう反応して良いか困り果てる。

「あは、なんか思ってたよりかわいいーね、ボガード」

可愛いというのが容姿ではなく、照れて何も言えなくなっている今の様子。そう理解するのにも少し時間が掛かり、理解したところで更に顔が高揚していく事にも気付く。

ラグオルで何かあったのだろう。アナの様子を見ながらクロエはそれを直感したが、あえて口にする事はなかった。口にしては「野暮」というもの。

一方ボガードは、ラグオルで何をしたらどうかと自分の行動を振り返りながら考えていた。

護衛すると申し出た以上、アナを助けた事は当然。それだけが彼女の態度を一変させた訳ではないはず。むしろ機嫌を直して貰おうと取った行動は全て裏目に出ていたはず。

なのにどうして？

その答えは、はしやく本人のみぞ知る、と言ったところか。

ボガードには判らない事が多すぎるが、一つハッキリしている事がある。

ころころと変わる喜怒哀楽。子供のように幼い性格が、彼女の魅力なのだということ。

そしてそんな彼女の愛くるしさに、鼓動を高鳴らせている事実。

初めての感覚と感情に戸惑うボガードは、後にさらなる感情の高見を知る事となるだろう。